

Maltby, Arthur: *Economics and Commerce. The Sources of Information and Their Organization.* London, Clive Bingley, 1968, 239p.

本書はリヴァプール図書館学校の senior lecturer である著者によって英国の図書館協会の試験のための教科書として書かれたものである。著者が序文で述べているように、P. R. Lewis が *The Literature of the Social Sciences. An Introductory Survey and Guide*, London, Library Association, 1960. で試みた社会科学分野全般にわたる文献案内の仕事を手台として主題を経済学に限定し、より一層くわしい書誌的サーベイを展開、経済学文献の入門的案内書たらしめようとするのがねらいである。全体の構成は次の16章に分れている。

- 第1章 経済商業活動の範囲
- 第2章 百科事典と辞典
- 第3章 ダイレクトリーおよび同種類の参考図書の評価
- 第4章 経済学および経営学の文献案内：パンフレット形態の書誌
- 第5章 遡及的書誌
- 第6章 古い図書および史料集の書誌：経済・社会史家のための原史料
- 第7章 カレントな書誌と雑誌文献
- 第8章 政府刊行物と経済学者
- 第9章 経済統計の情報源
- 第10章 その他の情報源：経済ドキュメンテーションの若干のギャップ
- 第11章 経済学および商業関係図書館：その所蔵と特性
- 第12章 必要な出版物の収集：図書の選

択と図書館協力

- 第13章 出版物の利用のための組織化：分類、目録、索引
- 第14章 業務組織と運用
- 第15章 若干の重要な経済学および商業関係図書館
- 第16章 代表的な質問の処理

以上の章別構成で本書の意図するところは、おのずから明らかであるが、以下、簡単に内容を紹介しよう。第1章では経済学、商業学の性格および、その主な4分野（経済史・商業史、経済原論、応用経済学、商業学・経営学）の内容の紹介がなされる。第2章から第10章迄は経済学書誌を形態別に分類し、主な文献の解題が試みられている。その全部を紹介するゆとりはないが、一、二の章をとりあげてみると、第4章では著者は、文献案内を主題分野の適切な情報源を提供する参考図書と定義し、前掲 P. R. Lewis の書物および、アメリカにおけるこれに匹敵する C. M. White and Others: *Sources of Information in the Social Sciences: A Guide to the Literature*, 1964. をはじめとする経済学および経営学の代表的な文献案内10点の解題がなされている。

つぎに比較の見逃されやすいが意外に有用なパンフレット形態の小書誌について20点程実例をあげて説明を加えている。

第5章では19世紀以降を対象とする代表的遡及書誌として「ロンドン社会科学文献目

録」、ユネスコの「国際経済学文献目録」、国際国民所得・国富学会の「国民所得・国富文献目録」、アメリカ経済学会の「経済雑誌索引」が解説される。ついで経済史および、さらに専門的な主題書誌、代表的な学会誌に掲載される書誌、経済関係書誌が扱われている。

第6章では19世紀以前の経済学史、経済史を対象とした書誌が扱われる。先ず一般的書誌とshort title catalogueがあげられ次に1701年から1848年をカバーする代表的な専門書誌としてJ. R. McCullochの*The Literature of Political Economy*. 1845. H. Higgsの*A Bibliography of Economics (1751—1775)*, 1935, ハーヴァード大学ペーカー図書館の*Catalogue the Kres Library of Business and Economics, 1940~1965* およびL. W. Hansonの*Contemporary Printed Sources for British and Irish Economic History (1701~1750)*, 1963の4点がとりあげられている。ヒッグズは前掲書完成以降1750年以前をとりあげ、完成しようとして果たさなかったが、そのゲラ刷が残された。これを基礎にして拡大し、さらに1冊につき1ヶ所の所在を記入したハンソン氏の仕事は最近10年における英国において個人により試みられた単一主題を扱った書誌の代表作として評価される。つぎに経済史関係書誌、史料集があげられ、最後に会社関係文書保存の重要性が説かれる。

第11章以降は重要な経済学関係の図書館の紹介、文献の収集、整理、サービスのための組織に関する諸問題のサーベイにあてられている。

以上が本書の大要であるが、一読した感想としてこの書物はP. R. LewisおよびC. M. Whiteの2著によって満されなかった

我々の不満をある程度解決してくれる好著とあってよいであろう。採録文献の範囲も適及の文献に迄よく眼をくばられており、文献の解題および評価が前著のように平面的でなく立体的に行なわれ、各文献間相互連関の分る叙述になっていることは本書の大きな特色である。また単なる参考図書のみでなく世界の重要な社会科学図書館の蔵書について説明を試みているのも有難い。

但し、本書を経済学の分野の専門的ライブラリアンおよび経済学者の専門的使用にたえるというのは、条件づきでないといえないのではないか。例えば収録範囲についてみると英文文献にかなり片寄り、独・仏文献に弱いのは矢張り片手落ではないか。この点はアメリカの前記Whiteの書物の方が国際的ではないかと思われる。また一般に資本主義国で出版されるこの種の書物に共通している欠点であるが、マルクス経済学関係が完全におちていることは、同様である。また、これは一種のあらさがしに近くなるが、古典経済学者に関する参考図書の項目は水田教授、天野敬太郎氏の業績を知っている我々から見ると矢張り不満が残る。社会科学図書館の所で一橋大学のメンガー文庫に触れられていないのは、むしろ我々の怠慢であるかも知れない。

結論として本書は以上のような条件づきで社会科学文献案内の入門書としては相当によくできた書物というべきであって、真に国際的な視野をもった社会科学文献案内の出現は、なお今後に待つべきであろう。

(一橋大学経済研究所日本経済統計

文献センター) 細谷新治